

第二次審査（論文公開審査）結果の要旨

Dietary habits in Japanese patients with chronic spontaneous urticaria

日本人慢性特発性蕁麻疹患者の食習慣

日本医科大学大学院医学研究科 皮膚粘膜病態学分野
研究生 亦野 蓉子

Australasian Journal of Dermatology, volume 61, number 3, 2020 掲載

DOI: 10.1111/ajd.13283

慢性特発性蕁麻疹 (chronic spontaneous urticaria, CSU) は特定の誘因なく 6 週間以上続く膨疹である。CSU の病因は不明であるが、自己免疫、炎症、凝固、自己アレルギーとの関連が示唆される。食習慣は CSU の病態を修飾する。本研究では成人日本人 CSU 患者の食習慣を健常者と比較し、疾患重症度と各食品・栄養素摂取量との相関を検討した。

日本医科大学千葉北総病院、附属病院皮膚科外来通院中の日本人成人 CSU 患者 70 名 (男性 29 名、女性 41 名) を対象とした。対照は患者と年齢・性別を一致させた 70 名の健常者とした。CSU の重症度は urticaria control test (UCT) で評価した。患者と対照の食習慣は brief-type self-administered diet history questionnaire (BDHQ) で調査した。回答結果から摂取エネルギー、各食品・栄養素摂取量を算出した。CSU 患者と対照の各栄養素・食品摂取量の差はウィルコクソン符号順位検定で評価した。CSU 患者を uncontrolled 群 (UCT \leq 11, n = 35) と controlled 群 (UCT \geq 12, n = 35) に分類し、2 群間の差をマン・ホイットニー U 検定で評価した。UCT と各項目との相関はスピアマンの相関係数で評価した。各項目と CSU 発症あるいは uncontrolled CSU との相関は、多重ロジスティック回帰分析で解析し、年齢、性別、body mass index (BMI) で補正した。

CSU 患者の BMI は対照より高かった。対照と比べ、CSU 患者のコレステロール、葉酸、食物繊維、ビタミン D、ビタミン K、Cu、Fe、Pi、Ca、Mg、Na、食塩、卵、緑黄色以外の野菜/キノコ/海藻類の摂取量は高く、アルコール摂取量は低かった。ロジスティック回帰分析の結果、BMI と卵摂取量は CSU のリスク因子と判定した。Uncontrolled CSU 患者の嗜好飲料及びコーヒーの摂取量は controlled CSU 患者より高く、ロジスティック回帰分析で嗜好飲料摂取量は uncontrolled CSU に相関した。

肥満患者の脂肪組織では TNF- α 、IL-6、レプチンなど炎症性アディポカイン産生が増え、肥満細胞のヒスタミン・ロイコトリエン放出などを誘導するため、BMI が上がると蕁麻疹が誘導される可能性がある。コレステロールを多く含む卵の摂取量増加は LDL コレステロ

ールの血管壁沈着による酸化 LDL 産生と、それによる肥満細胞からのヒスタミン放出を誘導する可能性がある。また、コーヒーに含まれるサリチル酸、安息香酸などの仮性アレルギーが肥満細胞のヒスタミン・ロイコトリエンの遊離を促す可能性がある。

第二次審査では、①CSU 患者でアルコール摂取量が減少していたことの考察、②UCT を 12 点で分ける臨床的意義、③CSU とストレスとの関連、④CSU と遺伝的背景との関連、などに関して質疑がなされ、それぞれに対する的確な回答が得られ、本研究に関する知識を十分に有していることが示された。

本研究は BDHQ を用いて成人日本人 CSU 患者の食習慣を詳細に検討した初めての報告であり、その臨床的意義は高いと考えられた。以上より本論文は学位論文として価値あるものと認定した。